「避妊・中絶」を学ぶ
――「ジェンダー論」の授業から――

木　村　尚　子

（受付　2020 年 10 月 23 日）

1. は　じ　め　に

私は2018年度から，本学人文学部人間関係学科の科目である「ジェンダー論」（前期）を担当しており，この中で「避妊・中絶」[1]というテーマを扱ってきた。授業実施前の段階では，「避妊・中絶」について，実際に学生がどのような情報を得ており，どのような知識を必要としているのかは不明であった。生殖にまつわるジェンダーを主たる研究テーマとしてきた私にとって，学生たちの「避妊・中絶」への関心や問題意識は，たいへん興味深い研究対象である。そこで，開始から３年を経た今，学生との対話を通して得たものを総括し，本授業の課題を明らかにすることとしたい。

本授業で使用したテキストは，由井秀樹編著『テーマでひらく学びの扉　少子化社会と妊娠・出産・子育て』の一つの章，拙著「避妊・中絶――「産まない」ことに向き合う」である。同書全体は，妊娠・出産・子育てをめぐる過去を顧み，少子化が喫緊の課題とされる現在，何を問う必要があるのかを明らかにしようとするものである（由井編著2017：iii–iv）。本書は，大学生向けテキストとして使用されることを想定して編まれ，10名余りの執筆者によって書かれており，不妊や生殖補助技術，養子縁組などの章もある。本授業では，これらの生殖する／しない身体や，そこに生起する問題に着目することで，学生たちが性や生殖の社会的・文化的意味づけに気づき，これらにかかわる社会的規範や権力関係を考えることをねらいとした。同書の一章が「避妊・中絶」である。

なおジェンダーは，「性差に関する知」「性別にかかわる社会的事実」と定義され，同時に，社会的規範や性差にかかわる抑圧的な社会的事実を明らかにするとともに社会的相互作用を分析する営みとされている[2]。「肉体的差異に意味を付与する知」（スコット2004：24）とも言われるように，生物学上の「男性」「女性」の区分は社会関係を大きく規定している。生殖に注目することで，男女間の「肉体的差異」はもちろんのこと，その曖昧さ，さらに，生殖の

1　本稿では人工妊娠中絶を「中絶」と略記する。
2　日本社会学会社会学事典慣行委員会編（2010）『社会学事典』丸善，大澤真幸他編（2012）『現代社会学事典』弘文堂による。

枠を揺るがす多様な性のありように気づくこともできるだろう。学生たちの多くにとって結婚や出産，子育ては必ずしも身近なものではないと想像するが，自身の生育過程や家族について考え，これらを取り巻く歴史的経緯や社会的背景を知ることは，社会を知る一端になると考える。

このうちの「避妊・中絶」は，いわゆる男女間の性行為が前提であるという点で限定的だが，妊娠，出産などの章に比べると，多くの学生たちにとってより現実的で具体的なテーマであると言えよう。同時に，公には語りにくい側面もあることが予想された。そのため執筆に当たっては，「避妊・中絶」の是非を問うのでなく，多角的な情報を提供し共に考える姿勢で臨んだ。結果的に，学生たちは真剣に考え，ある学生の体験に基づいたコメントに他の学生が応答するなど，ともに学び合い，私にとっても多くの気づきを与えられる機会であった。

なお「ジェンダー論」は2018年度に開講された科目で[3]，人文学部人間関係学科社会学専攻の 2 年生以上を対象としている。受講学生数は各年度約20–40名で，2018年度と2019年度は対面型授業，2020年度は非対面オンデマンド型でおこない Moodle を使用した。対面型授業では，各章とも担当する学生がテキストの内容等を発表し，クラスでの意見交換やグループでのディスカッション，教員である私からの補足などをおこなった。非対面型では，事前の課題により学生の理解や疑問を把握し，授業ではそれらに応える形で補足をおこなった。また，学生から意見交換やディスカッションの提案もあった。

本授業に際し，「避妊・中絶」について，これまでどのように学んだか，また疑問や知りたいことは何かなどを質問し，学生の自由な回答を求めた。学生からの反応は，対面型授業における授業内での発言を含む，リアクションペーパー，課題，試験などの自由記述や質問等による。本稿では学生の個人情報に配慮し，個人が特定されない形で引用等をおこなうこととする。また便宜上「男性／男子」「女性／女子」という表記を使用することがあることもお断りしておく[4]。

2.　テキストと授業内容

本章テキストでは「最もよくみられる性交渉による妊娠や中絶」（木村2017：63），とくに生殖を目的としない性交渉で直面する避妊・中絶を扱っている。学生たちは，本章に先んじて「出産」の章を学ぶ。また，のちに生殖補助技術や出生前診断に焦点を当てた各章を学習することになるが，本章ではこれらにかかわる妊娠や中絶は対象としていない。また本章は

3　これ以前にも，また他授業でも，学生がジェンダーについて学ぶ機会がある。
4　学生によってはコメント等で自分の性自認や性指向を記すことがあるが，原則として学生の性別は把握していない。

「避妊」と「中絶」，まとめの節の三つの節で構成されている。以下，各節の論点を簡単に整理し，授業で補足した内容についても紹介する[5]。

2-1. 避妊

本節では最初に，日本における避妊の歴史を概観した。知識人女性が夫婦間で避妊をおこなうことに否定的であった明治・大正期を経て，産児調節運動に関心が集まるようになったものの，戦争への移行とともに避妊や中絶が禁止され，第二次世界大戦後は一転して優生保護法に裏付けられた家族計画運動が実施された経緯をたどった。次にさまざまな避妊法を紹介し，日本で長らく避妊の第一手段となっているコンドームと性感染症予防の関連，また経口避妊薬（以下，ピル）導入の経緯について述べるとともに，日本では未認可の注射，避妊インプラント（皮下埋没法），パッチ等の避妊法や海外の事情にも触れた。

これらにより避妊に歴史的変遷があることを示し，避妊が，いつ禁止あるいは推奨されるのか，また，どの手段がどのように提供され受容されるのかなど，それぞれの時代，国や地域による価値判断が影響していることを示した。

2-2. 中絶

本節では，明治以降の堕胎取り締まりや刑法堕胎罪，戦後の優生保護法から母体保護法への変化を通して，中絶をめぐる法と政策を確認した。また中絶論争が続くアメリカで，中絶を選択することが女性の権利として主張された経緯と，中絶の実行は容易であるものの，妊娠した女性やカップルの意思決定を尊重しない日本の法制度など，現代の問題を提示した。

加えて日本では，中絶を選択する女性に対しことさら厳しい負の眼差しが向けられ，医療現場においても，より安全で身体への負担が少ない技術や医薬品が提供されづらい状況を作っていることを指摘した。

2-3. 避妊・中絶のこれからに向けて

現在，海外で広く実施されている避妊・中絶の手段の多様さ，アクセスの簡便さに比べ，日本で認可されているものは限定的である。しかし同時に，新しい技術の導入が必ずしも女性の健康を目ざすものとは言えないことを，アジア諸国の報告を引用して紹介した。また日本社会において「避妊・中絶」を自らの身体に引き受けざるを得ない女性の選択や決定は，法制度においても，性交渉の相手との関係性においても，もっと尊重される必要があることを指摘した。

5　本節での拙稿（2017）の引用は割愛した。詳細については拙稿を参照されたい。

最後に「産む」けれど「育てない」,「産まない」けれど「育てる」というカナダの狩猟採取民 Dene の人々の考え方を引用し,「産む」「育てる」が一致しなくとも非難されない社会について考えてほしいとした。

2-4.　授業

授業ではテキストの解説とともに，ここに盛り込めなかった情報を補足した。日本で実施可能な避妊法を示し，いずれも単独で100パーセント確実なものがなく，予期せぬ妊娠は誰にもあり得ると説明した。ピルの種類が複数あることや禁忌，副反応，価格，また中絶の初期と中期の違いにも触れた。その他，いくつかの参考資料を紹介した[6]。

3.　学 生 の 応 答

学生たちが高校までに学習したいわゆる「性教育」の内容は，おそらく学校間で差異があると予想された。また学校外や大学の授業などでも知識や情報を得ているはずであり，とくにセクシュアリティや性の多様性については入学後の 1 年次から学習の機会がある[7]。そこで,「避妊・中絶」を中学・高校で学習したことがあるか，あればその内容，また学校外の情報について受講生に質問し，回答を得た。併せて，学生がテキストや授業を通して発見したこと，考えたことを記述したので，これらを考察する。とくに2020年度前半はコロナ禍による外出自粛要請が出されており，中・高校生による妊娠相談が増加したというニュースに関心を寄せた学生が多かった。

3-1.　学校教育における「避妊・中絶」

まず，中学・高校における「避妊・中絶」の学習経験については,「ありませんでした。教科書には「こんな例もあります。」のような感じでさらっと載っていた」,「女性と男性の体のしくみの違いや赤ちゃんがどうできるかなどは少し習ったが，妊娠・中絶については習っていない」というものや,「保健体育の授業で 1 時間程度教科書にそって説明されたくらい」,「詳しく教えてもらった記憶はない」などの反応が多かった。

「避妊・中絶」を含む「性教育」に対する学生の意見には，以下のようなものがある。「避

6　一例として日本産婦人科医「望まない妊娠を繰り返さないために 中高生のあなたへ」(http://www.jaog.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/02/24b8aaafa1f584a840da5d0fbc600d8f.pdf　最終アクセス 2020年 8 月 6 日)。

7　何人かの学生が,「ジェンダー」という言葉から連想するのは「性の多様性」「多様な性」だと答えている。ある学生は「大学に入ってからジェンダーに関する授業をいくつか履修してきました。そこでは性的マイノリティについて学んできましたが，いわゆる普通の男女のジェンダーに関する知識はあまり持ち合わせていない」と書いている。

妊について高校ではほとんど教わらなかったです。こんな適当にやっていいのかなと思った」，「コンドームやピル，避妊や中絶という言葉だけ教わりました。なのでコンドームがどういった見た目でどう使うのかとかそういった具体的なことは教わらなかったので未だによく分かりません」，「私の経験上では授業で性について学ぶとき，教科書も教師もどこかぼかした表現や婉曲的な表現をしていた」，「はぐらかされたような感じだった」などである。ある学生は，大学生になるまで妊娠や避妊についての知識がなく，そのことを自覚してコンドーム製造会社や医療系のホームページ，動画などで調べたというが，「特にコンドームの使い方についてなかなか難しくて他の人はどうやって使い方を覚えるのか気になります」と書いている。

一方で，「中学，高校と性に関する授業で避妊について」学んだ，「人工妊娠中絶の一連の流れ」，「中絶が身体に及ぼす影響，どの様にして中絶手術が行われるか」，「中絶をできる期間が22週未満までということ」，「妊娠初期だと，薬などで中絶ができるが[8]，中期ごろになると中絶するのが難しい状況になる」などの知識を得たと書いた学生がいる。

この他，副教材として，中絶した女性へのインタビュー映像や漫画『透明なゆりかご』[9]の一話を見た，「高校の授業では中絶は殺人なのか，それとも女性の権利なのかという話をした」などの報告がある。

講演会など「特別に講師がきて「避妊・中絶」のことについて学ぶ機会があった」という回答も複数あった。「専門の女性講師」から「妊娠のメカニズムや避妊具の重要性，出産の大変さ」，「コンドームの正しいつけ方や，ピルの副作用について」，「もし避妊ができなかったときの対処法（アフターピル）など」詳しく聞いたという回答がある。一方，「避妊や中絶の方法，なぜ避妊をする必要があるのかといったこと」は聞いたが「あまり深く学ばなかった」，「出産やデートDVに関してはありましたが，避妊や中絶についてはなかったので，講演会でそういう話題を取り扱ってくれたらもっと理解も進むし記憶にも残ると思いました」という意見もある。

全体的には，内容は「主に避妊について」，「中絶については避妊の付加情報的な扱い」，「中絶のことはあまり習わず，避妊のことばかり習った」という回答が複数あり，「男子と女子で保健の授業が別々だったので」自分が参加しなかったグループのことはわからないと書いた学生もいる。逆に，ある学生は高校で，「中絶については，避妊に比べると真剣に取り組ませていた印象がある。私は男子校出身だが，それでも「他人事ではない」と教師に話をしっかり聞くよう釘を刺された上で授業を受けた」と書いている。また，大学入学後に別の授業で中絶に関するドキュメンタリーを見たと書いた学生が複数いた。

---

8 「薬などで中絶ができる」とあるが，経口薬剤による中絶は2020年10月現在日本では未承認である。
9 沖田×華『透明なゆりかご 産婦人科医院 見習い看護師日記』（2014），予期せぬ妊娠や中絶を扱っており，のちNHKテレビドラマ化された（2018）。

中学・高校での学ぶ側については，「避妊道具の話がでてきたりしたときは，クラスメイトの一部がニヤニヤしだしたりなど，そこまで真剣に受けている様子はなかった。（中略）コンドームの正しい使用法を伝える場面では，クスクスと笑い声が聞こえてきたりしてきた。「性教育＝下ネタ」と捉えられているのだろうか」という記述がある。また，「女子は将来子どもを産むのだから，身体を大切に扱え」「今少子化している日本に貢献しろ」などと発言する教員に「女子は完全に嫌な顔を見せていた」との記述もあった。

3-2.　学生たちの記述から

学生たちの記述をさらに詳しく見てみよう。

高校までの学校教育で紹介された避妊法としてコンドームやピルをあげた学生が多かったが，「排卵期を避ける」，「体外射精をしたからと言っても完全に避妊ができるというわけではない」という知識を得たという記述もあった。タイミング法とも呼ばれる「排卵期を避ける」方法は，避妊法としての信頼度は低い。また膣外射精（体外射精，性交中絶法）は，現代では「避妊法」とはされていない（北村2013：86）。「ジェンダー論」の授業ではパール指数[10]などを用いて各避妊法の有効性の比較を示したが，学生はこれに反応し，「改めて性交中絶法の危険さを認識した」，「性交中絶法が危ないというのは知っていたが，いろいろある避妊方法の中で一番危なくて不確実なものというのは知らなかった」，友人が「性交中絶法」を実行しているので危険性を知らせたいなどと書いている。同じくコンドームについても，思っていたより避妊効果が低く「驚きました」という反応がある。「避妊したら妊娠はしないという考え」や「中絶するということは避妊せず性行為をしたということ」などの思い込みに気づき，「気をつけていても妊娠してしまう人もいる」と認識を改めたという学生もいる。また100％確実な避妊法がない以上は「中絶は悪であるという認識は改めなければいけないと思いました」と書いた学生もいる。

また学生の記述からは，ピルについて学校現場での評価が分かれることが見てとれる。「海外よりも日本はピルを利用している人が少なく，日本でも女性を主体とした確実な避妊方法であるピルをもっと利用するべきだというような内容」を学習したという声がある一方，「ピルでも避妊はできるがホルモンバランスの乱れなど副作用がある」，「コンドームを使う方が副作用もなく，性感染症も同時に防ぐことができるため避妊にはコンドームの使用を推奨されていた」という回答もあった[11]。

10　100人がある避妊法を１年間用いた場合に，避妊に失敗する数。

11　ピルに対する消極的な見解は，若者向けの図書にも見られる。例えば『男の子の性の本　さまざまなセクシュアリティ』では「ピルは女性のからだに負担をかける」と書かれている（メンズセンター編著2000：28–29）。

ピルの有害作用に起因する不信感，あるいは化学物質を服用することへの抵抗や製薬業界への反発などは，1970年代以降の女性運動に顕著に見られた（荻野2014：125−129）。このような経緯を経た現在，学校ではピルに関する情報を積極的に与えないとする指導者側の意向を耳にすることもある。今日主流である低用量ピルにも，禁忌や有害反応があることが知られている。一方で，望まない妊娠を是非とも避けたいという意向を優先し，現在の日本で承認されている避妊法から選択する場合，コンドームを推奨してピルの情報を与えない，あるいはピルの否定的側面のみを強調することは適切だろうか。ピルが最善の避妊法ではないとしても，ピルを選択肢の一つとして若い世代に提示することは必要だと考える（芦野1999：3）。

またピルについては，月経困難症などの治療薬としての用途があまり認知されておらず，偏見の目が向けられることや，避妊用として用いる場合も，産婦人科医への受診や毎日の服用，経済的にも負担になると回答した学生が複数いた。

中絶については前節で，「22週未満まで」など医療面の情報を得たという回答に触れたが，同時に学生たちは感情面での情報も得ている。「中絶は母親の体や心に大きな影響を与える可能性が高い」ことや「命を奪ってしまうこと」，「中絶のこわさについて」教えられたと書いた学生もいた。またこのような学校教育からの影響か，「中絶は悪」，「どのような理由があっても妊娠中絶はして欲しくない」，「中絶は起きてはいけないもの」，「中高生の知識不足による望まない妊娠は，冷ややかな目で見てしまっている自分がいます」などの反応も見られる。

さらに，「中絶というのは子供を殺すことだから，望まない妊娠をしたときに中絶をするのかしないのかは難しい選択であるというふうに習った。ネットでは，一度中絶すると次に妊娠しにくくなると書いてあった」という記述もある。また，中絶手術は安全かという質問もあった。産婦人科医・北村邦夫はその著書『ティーンズ・ボディーブック 新装改訂版』で，中絶手術の危険性はゼロではないが，現代の日本ではほぼ安全な手術が受けられる状態であり，「だからセックスするな」と手術の危険性を脅しのように使うことは無意味だと述べている（北村2013：98−99）。

学生たちの何人かは，中学・高校時代に「できちゃった結婚をした人や望まない妊娠をして中絶を行った人」が周囲にいたと書いている。ある学生は，避妊せずに妊娠し２回の中絶手術を経験した友人に対し，無責任としか思えず「少なくともその友達には同情できない」と述べている。このコメントに複数の学生が応答し，「中絶は安易にすることはいけない」，「プラスになることではない」と記述している。また「本人の責任で中絶を繰り返すことになっている場合も，そのことについて話し合える人がいることが大切だ（中略）それは男女どちらかというわけではなく，両性に必要なことだと思うし，中学，高校の性教育でそういう授業があっても良いのではないだろうか」と書いた学生もいた。

学校教育に対しては，「日本では，性や性教育について，どこかまだタブーだったり恥しいものという雰囲気が拭えないように感じるので，そういう雰囲気から変えていくことが必要になる」，「中絶や避妊を含めて，日本の教育は性に関する事柄を避けすぎていると感じます。性に関する事柄への関心が高まる中高生の時期にしっかりと知識を身につけておけば，望まない妊娠も少しは減少するのではないかと思います」などの意見が寄せられた。「中高生の頃からもっと知らなければならない」，「高校生の時に聞かせてほしかった」のような意見は，学校教育への期待の表れでもある。同時に，学校外では良質で必要十分な情報を得ていない現状を示してもいる。

3-3.　男女の関係性

「避妊・中絶」を考えるうえで学生たちの多くが着目しているのが，性行動における相手との関係性である。冒頭でも触れたとおり「避妊・中絶」の前提として男女間の性交渉があるため，学生のコメントにも「男性」「女性」の区分が見られる。

避妊に関し何人かの学生は，「女の人に任せっきりではなく男の人も自分からかかわっていかないといけない」，「しっかりパートナーと話し合った上での行動，責任のある行動」が必要，「中には女性側が望んだことや，非がある場合があると思うが，男性側に非がある場合があると考える。そのため，男性側が避妊などの面で最善を尽くして女性の気持ちを汲んで行動すべきだと改めて考えさせられた」などと記述している。

一方，男性に対する懐疑的な見方，あるいは不信感も数多く表明されている。たとえば中学，高校と「性に関する授業」で避妊について学んだという学生は，「コンドームなどを男性が付けようとしない場合は自分で付けるように促すなどが大事だ」と学んだと書いている。この場合の促す側は女性であると思われる。また，仮に男性用ピルが開発されたとしても「男性は積極的にピルを服用してくれるのか疑問に思いました。もちろんピルを服用してくれる男性もいるでしょうが，「女子がピル飲めばいいじゃん」というような考えを持つ人もいそうだなと思いました」，「パートナーがしっかりした人で避妊に協力してくれる人ならいいけど，避妊に協力してくれない人もいるとよく耳にする」，「コンドームを装着するのは男性の身体であり，男性が外してしまう，付けないことを選択すると女性はどうすることもできないと思う」，「女性が避妊したいことを男性に言いづらい環境が避妊をしない性交をしてしまう要因のひとつ」と書いた学生もいる。

中絶に関しては，この懐疑がより大きい。「中絶は安易にすることはいけない」が「女性だけが非難される傾向にある」のはフェアではない，「女性をはらませた男性はほぼ何も思わない人が多いと思います。自分はその胎児を殺すという実感はないし，女性が切り出さなければ，そのことを知らずにのうのうと生きるだけです。そのことを考えると，避妊しないで悪

く思われるのはほぼ女性だけではないのでしょうか」という記述がある。同様に「責任を押し付けられるのは女性という現実」，「女性の犠牲が男性に比べて大きすぎる」などもある。また別の学生によるコメントでは，「Twitter で「出産はさ，もう男女どっちが妊娠するかわからないシステムになったらどうだろう。」というようなツイートを見て，その世界いいな，と思いました」[12] という意見があり，これに賛同する声が複数寄せられた。これについて学生との議論を深めることはできなかったが，妊娠可能性のある身体を不利益と感じること，相手とのコミュニケーションを探るより先に「システム」の変更を夢想する傾向を感じた。

これらとは逆に，「女性が避妊や中絶を自分の意志で決定する事が出来ないという事に関しては，パートナーとの関係が大きく影響するのではないか」という指摘や，「よく男性が「責任とる」と言っていたり，逆に女性が男性に「責任とって」と言います。妊娠してしまったのは男性と女性どちらもの問題であるため，男性ばかり責任を問われることに疑問を感じます」という意見もあった。

先行研究によれば，避妊の必要性を理解していることと実際に行動できることは必ずしも一致しないと指摘されており（山口ほか2007；林ほか2012），先の学生のコメントでは「女性が避妊したいことを男性に言いづらい」場面などがこれに該当するだろう。またこれとは反対に，「避妊に協力してくれない」，「女性をはらませた男性はほぼ何も思わない」という不信感も，現実の関係性を反映しているとは限らず，メディアなどを通じた情報や想像による不安感を示している側面もあると考えられる。また，たとえ予定外の妊娠であっても，出産や子育てを目指すという選択もあり得ることから，大学等の教育機関が彼らの選択と学びの継続を支えることも必要であろう（中山2020：80）。

そもそも学生たちの性行動が実際に活発であるかどうかは不明である。日本性教育協会の最新の「青少年の性行動全国調査」[13] によれば，近年，高校生や大学生の性交経験率は低下していると報告されている（日本性教育協会編2019）。またある学生は，中学や高校で「性教育」が実施されたものの「そもそも性行為自体を詳しく学べていない」と記述している。では，学校での「性教育」を補うものに出会っているかといえば，先にも指摘したようにそれほど多くが期待できるわけではない。性や身体の情報源として学生があげているのは，「ネッ

12　https://twitter.com/izakayamarichan/status/1273986646669578240?s＝21　（最終アクセス2020年６月25日）。

13　日本性教育協会による「青少年の性行動全国調査」は，全国の中学・高校・大学生を対象に，1974年からほぼ６年おきに青少年の性行動・性意識の変化とその背景にある要因を解明したものである。これによると，大学生の性交経験率は1980年から1990年代にかけて上昇し，2005年には男子63％，女子62％であったが，その後2017年までに男子で16ポイント，女子で25ポイント低下した。高校生においても2017年には男女とも２割を下回っているという。また前回2011年の調査から性行動の不活発化が見られ，2017年にはそれがさらに進行し，とくに女子で性行動の不活発化や性に対するイメージの悪化が顕著だと指摘している。（日本性教育協会 https://www.jase.faje.or.jp/jigyo/youth.html 最終アクセス2020年７月12日）。

ト（良くも悪くも）」，雑誌や漫画，ドラマなどである。「人に聞きます」，「母親からの助言」と書いた学生がいる一方で，親や友人とは話題にしないという回答もあった。産婦人科医で「ウィミンズ ウェルネス」代表の対馬ルリ子は，「私自身も，娘が10歳になるころから，からだのしくみと性のことをきちんと教えておかなければと思い，いろいろ試行錯誤してきました。（中略）日本では今までずっと，正しい科学的な知識（性と生殖に関すること）を系統立てて教えていないので，私たち大人も正しいことを知らず，何をどういうふうに教えていいのかわからない，という実態です」と述べている（オーキッドクラブ編2002：132-134）。

3-4.　性教育の今後

「ジェンダー論」の授業では，「避妊・中絶」に関連して DV や「性的同意」についても紹介した[14]。これらを含め，学生からは以下のような応答があった。「パートナーの身体だけではなく，自分の身体についても把握していないことが多いと思う。自身の身体の適切なケア，またケアが受けられる場所（施設）についても知らないことは問題である。これは日本の性教育がかなり遅れていることに原因があると考える。性教育とは性行為についてのことだけでなく，自身と相手の身体について知り，適切なコミュニケーションが取れるようにするためのもののはずである。性教育を充実させ，身体（性）について話題に出しにくいという風潮，誤解，偏見をなくすことが必要不可欠である」。また，「正しい知識を身につけることは大切なことであり，もっとオープンに話していくべき，人の命にもかかわってくるという認識，風潮を広げていく必要があると思う」。さらに「生殖だけが性ではないと思う。（中略）性＝一人一人違う個性という解釈もできるのでは」との指摘もあった。

すでに学生たちが指摘しているように，日本の学校教育における「性教育」は，多くが中学・高校から始める「生殖教育」「セックス教育」だと言われるが[15]，「学習指導要領に必ず付されている歯止め規定があり[16]，コンドームの教育は家族を作るという前提での教育であり，子どもたちの知りたいことや必要なことはベールに隠され」ている（齋藤2018：8）[17]。つまり「生殖教育」「セックス教育」としても十分ではない。

14　京都市男女共同参画推進協会（2018）『GENDER HANDBOOK 性的同意』など。

15　高崎順子（2019）「なぜ日本の性教育は“セックス中心”なのか」（https://president.jp/articles/-/29133　最終アクセス2020年10月12日）など。

16　中学校学習指導要領「保健体育」では「妊娠の経過は取り扱わないものとする」とあり（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/hotai.htm　最終アクセス2020年10月26日），これが「歯止め規定」と呼ばれている。その意味するところは「妊娠の経過」というよりも「妊娠に至る経過」を指すと解釈される。

17　NHK 高校講座「保健体育」でも「結婚生活と健康」に続く「家族計画と人口妊娠中絶」という単元で避妊や中絶が扱われている（https://www.nhk.or.jp/kokokoza/radio/r2_hoken/ 最終アクセス2020年10月22日）。例外的な取り組みとして，私立和光小学校「こころとからだの学習」（2018）がある（http://www.wako.ed.jp/e/cyuugakunen/20180312a/#more-3343　最終アクセス2020年10月12日）。

一方で学校の外での誠実な取り組みが皆無だったわけではなく，一般書として刊行されているものもある（尾藤編著1997；オーキッドクラブ編2002；上村2006；高柳編2008；すぎむら2011など）。とくに近年は欧米の実践が積極的に紹介されており（ヒックリング2003；サツーロ2004など），その一つであるノルウェーの二人の医師，エレン・ストッケン・ダールとニナ・ブロックマンによる『世界中の女子が読んだ！からだと性の教科書』には，次のような記述がある。

> 他人から干渉を受け，それに影響されて自分のことを決めるのでなく，手もとにある事実だけを基準としてものごとを決められるような社会を実現したいとわたしたちは思っています。みなさんには，噂や誤解，不安ではなく，正しい医学情報に基づいた選択をしてもらいたいのです。体のしくみについてしっかりした知識の土台を作っておけば，自信を持って自分のことを決められるようになるでしょう。セクシュアリティと性の健康にまつわる誤った通説は取り除かなくてはいけませんし，自分の体について決める権利を他人に渡してはいけないのです。この本が目指しているのは，あなた自身が納得できるような，正確な情報に基づいて賢い選択をするチャンスをあなたの手に渡すことです（ダール，ブロックマン2019：11–12，傍点は原文のまま）。

またオランダ在住のリヒテルズ直子は，『０歳からはじまるオランダの性教育』で日本の状況に触れながら次のように述べている。

> 日本の学校には，正しい性の知識を体系的に，子どもたちが学びとしてきちんと受け止められるように教えてくれる授業が大変少ないようです。ましてや，オランダのように，性行動における自分のボーダーラインの引き方，LGBTの人を差別しないための＜性の多様性＞を教える授業などは，ほとんど行われていないといってもよいでしょう。（中略）オランダの性教育では，保健衛生面だけでなく，他者のからだやこころを傷つけないよう欲望をコントロールする方法，友情や愛情の育て方，価値観の異なる他者の受容・尊重といった，社会性や情緒の発達にも関心を向けます。学校は，このようなスキルや心構えを，社会のなかで責任ある市民として生きていくために欠かせないトータルな力の一部として取り扱っているのです（リヒテルズ2018：193–205）。

このような考え方のもと，オランダの保健局では「安全なセックス」を「二つの避妊法を併用する」ものとし，コンドームとピルの積極的な使用を若者たちに推奨しているという（同：18–19）。また，先のダールとブロックマンは「とくに推薦したい避妊法」として避妊インプラント（日本では未認可）と子宮内黄体ホルモン放出システム（IUS）を挙げ（ダール，ブロックマン2019：149），「性感染症を予防できる避妊法はコンドームだけ」としている（同：162）。また中絶については，「女性の権利」であり「決めるのは，女性自身であるべき」とした上で（同：220），次のように述べている。

妊娠中絶を望む女性，避妊法の一つのつもりで中絶を意図的に利用する女性はごく一部です。たいがいは，危険日に無防備なセックスをしてしまったとか，避妊に失敗した，近代的な避妊手段が手に入りにくかったとか，あるいは――最悪の場合，性的暴行の結果なのです。妊娠中絶の件数を減らすことをゴールとするなら，効果の高い避妊手段が手に入りやすい環境を整えたり，性教育を充実させたりほうがよほど話が早いはずです。ところが残念なことに，妊娠中絶を制限する法律がある国ほど，避妊法や性教育が充実していないことが多いようです（同：222）。

日本の場合，「妊娠中絶を制限する法律」は一定条件の下では無いに等しいが，「避妊法や性教育が充実していない」状況があり，結果的に中絶は，女性身体により大きな負担やリスクを与えることを承知の上で選択される「避妊法の一つ」となっている。

ここ最近，日本でもこのような取り組みを普及させる場が試みられている[18]。報道によれば，国は，若い世代の「望まない妊娠」や「性被害」が社会問題となる中で，2021年 4 月から新たな「性教育」を小中学校などに導入する方針だという[19]。この動きは，近年とくに活発に展開されている国際的な性教育の動向と，その指針となっている国連の International Technical Guidance on Sexuality Education（国際セクシュアリティ教育ガイダンス）[20] の影響であろう。同ガイダンスは，性教育を健康と福祉，人権とジェンダー平等という枠組みの中に位置づけ，すべての国と地域の教育政策担当者が，５歳から18歳の子どもや若者を対象に，それぞれの年齢に適したカリキュラムを提供できるよう指針を示したものである。幼年期から成人期へと移行する子どもや若者に，彼らが直面する身体的，社会的，感情的な課題についての情報とガイダンスを提供し，自らの性と生殖の健康に責任をもつことができるよう支援することが目指されている。

これらは，本節冒頭で紹介した「ジェンダー論」の受講生が要望しているものでもある。これまでの「ジェンダー論」では全体として生殖を軸としたテーマで展開しため，幅広い視野に欠けており，その点で限界のあるものだった。今後は，学生の記述にあるように，「生殖教育」「セックス教育」の枠を超えて性について学びを深める授業展開ができるよう検討したい。身体と性について知り，個々の個性として認めた上で関係性をつくり，一人一人が「納得できるような（略）賢い選択をするチャンス」を手渡すことは「ジェンダー論」の目的でもある。

18　一例として2020年 8 月，NHK ラジオ第一「夏休み！ラジオ保健室～10代の性 悩み相談～」があり（https://www4.nhk.or.jp/radio-hokenshitsu/ 最終アクセス2020年 9 月28日），「自分の体のことを知ろう」「妊娠・出産・性感染症について」「多様な性（LGBT）について」などをテーマに，産婦人科医・高橋幸子らの専門家ゲストや聴取者からのコメントも紹介された。

19　NHK NEWS おはよう日本「変わるか？日本の“性教育”」（2020年10月 7 日）（https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2020/10/1007.html　最終アクセス2020年10月 9 日）など。

20　https://en.unesco.org/news/urges-comprehensive-approach-sexuality-education（最終アクセス2020年10月 9 日）。

ある学生は授業の最終的なまとめとして自身のことに触れ，「年上の社会人の彼」の威圧的な態度に，自分の意に添わない時も性行為を拒否できないことがあったが，授業を通して「彼がおかしいことに気付けたし，盲目から解放された」，今後は自分の意見を主張しつつ良い関係を作っていきたいと書いている。このような変容が，より多くの学生に起きることを願いたい。

4. むすびにかえて

以上，2018年度からの３年間，「避妊・中絶」をテーマに学生との対話を通して得たものを総括した。学生たちは「避妊・中絶」に関する良質な情報を必要としており，それは残念ながらこれまでの中学・高校では十分に提供されているとは言えない。学生たちの回答によれば，「避妊・中絶」だけでなく，自分の体や性について知らないことが多く，そのため不安を感じるという。また学生たちが体や性について誤解している場合もある。性行動がより活発になり得る大学生には，「避妊・中絶」に関する最新の医学的情報や国際的な動向，それらが持つ意味を考える機会を提供する必要がある。今後の性教育は，単なる技術的な情報としてではなく，自身の身体や性を知り，これらを肯定するとともに他者の身体や性を尊重し，より良い関係性を築くことを目標としたものになるよう期待したい。このような学びを通し，学生は，自分自身が納得できる「賢い選択」ができるようになるだろう。私が担当する「ジェンダー論」でも，この目標の一端を担えるよう工夫していきたいと考えている。

※３年間の「ジェンダー論」に参加してくれた学生のみなさんに感謝の意を表したい。

【文 献 ・ 資 料】

芦野由利子（1999）『ピルのことを知りたい――性と避妊を考える』岩波書店（岩波ブックレット No. 484）.
尾藤りつ子編著（1997）『性と生をどう教えるか』解放出版社.
ダール，エレン・ストッケン，ブロックマン，ニナ（2019）『世界中の女子が読んだ！からだと性の教科書』高橋幸子監修，池田真紀子訳，NHK出版（Dahl, Ellen Støkken　Brochmann, Nina *GLEDEN MED SKJEDEN* H. Aschehoug & Co. (W. Nygarrd) AS, 2017）.
林桐代，町浦美智子，佐保美奈子（2012）「大学生の性行動およびライフスキルの実態」『大阪府立大学看護学部紀要』，18(1)，45–55頁.
ヒックリング，メグ（2003）『メグさんの女の子・男の子からだBOOK』三輪妙子訳，築地書館（Hickling, Meg *Boys, Girls & Body Science: A First Book about Facts of Life* Harbour Publishing Co. Ltd. 2002）.
上村茂仁（2006）『恋するきみたちへ．ちっちゃい先生からのメッセージ』ふくろう出版.
木村尚子（2017）「避妊・中絶――「産まない」ことに向き合う」由井秀樹編著『テーマでひらく学びの扉　少子化社会と妊娠・出産・子育て』北樹出版，63–75頁.
北村邦夫（2013）『ティーンズ・ボディーブック 新装改訂版』中央公論新社.
メンズセンター編著（2000）『男の子の性の本 さまざまなセクシュアリティ』解放出版社.

中山良子（2020）「「合意」が大切！――身体を用いたコミュニケーションの基礎知識」ふらっと教育パートナーズ（代表 伏見裕子）編『ふらっとライフ それぞれの日常からみえる社会』北樹出版，71–84頁.
日本性教育協会編（2019）『「若者の性」白書 第 8 回 青少年の性行動全国調査報告』小学館.
荻野美穂（2014）『女のからだ フェミニズム以降』岩波書店.
オーキッドクラブ編（2002）『なやめるからだ オンライン外来730日のカルテ』TBS ブリタニカ.
リヒテルズ直子（2018）『 0 歳からはじまるオランダの性教育』日本評論社.
齋藤益子（2018）「わが国の性教育の現状と課題」『現代性教育研究ジャーナル』No 87，1–8頁.
サツーロ，ジェーン・A・W 他（2004）『男の子を性被害から守る本』三輪妙子訳，築地書館（Satullo, Jane A.W. *it happens to BOYS too* Rape Crisis Center of Berkshire County, 1987）.
スコット，ジョーン・W（2004）『増補新版 ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳，平凡社（Scott, Joan Wallach *Gender and the politics of history* Columbia University Press, 1988）.
すぎむらなおみ（2011）『エッチのまわりにあるもの 保健室の社会学』解放出版社.
高柳美知子編（2008）『イラスト版 10歳からの性教育 子どもとマスターする51の性のしくみと命のだいじ』合同出版.
山口（久野）孝子，小笠原昭彦，堀田法子（2007）「大学生の避妊に対する態度と行動とのずれに関する検討」『小児保健研究』, 66（1）, 83–91頁.
由井秀樹編著（2017）『テーマでひらく学びの扉　少子化社会と妊娠・出産・子育て』北樹出版.

Summary

Learning about “Contraception/Abortion”: Insights Gained from Teaching Gender Studies

Naoko KIMURA

I have dealt with the theme of “contraception/abortion” in a course on gender studies taught during three semesters between 2018 and 2020. This article discusses what I learnt from the interactions with students in these classes.

Students need reliable information about “contraception/abortion”, which is unfortunately not being sufficiently provided in current junior high schools and high schools. Students in my classes mentioned that they often felt anxious because they knew little – not just about contraception and abortion but also about the body and sexuality, more generally. Sometimes it also became clear that students had an incorrect understanding of certain physical facts. College students, who tend to be more sexually active than high school students, need to be provided with the latest medical information on “contraception/abortion” and international trends as well as opportunities to think about and discuss the implications of these facts. What they need to know is not only technical details but also their own bodies and sexualities. They should learn to accept their own bodies and sexualities and respect the bodies and sexualities of others. This would enable them to build better relationships and to make informed choices that they are comfortable with. I plan to adapt the design of this course so as to contribute to these goals, in the future.